十字の園

発行
御殿場十字の園
御殿場市深沢
印刷　岳麓印刷（株）

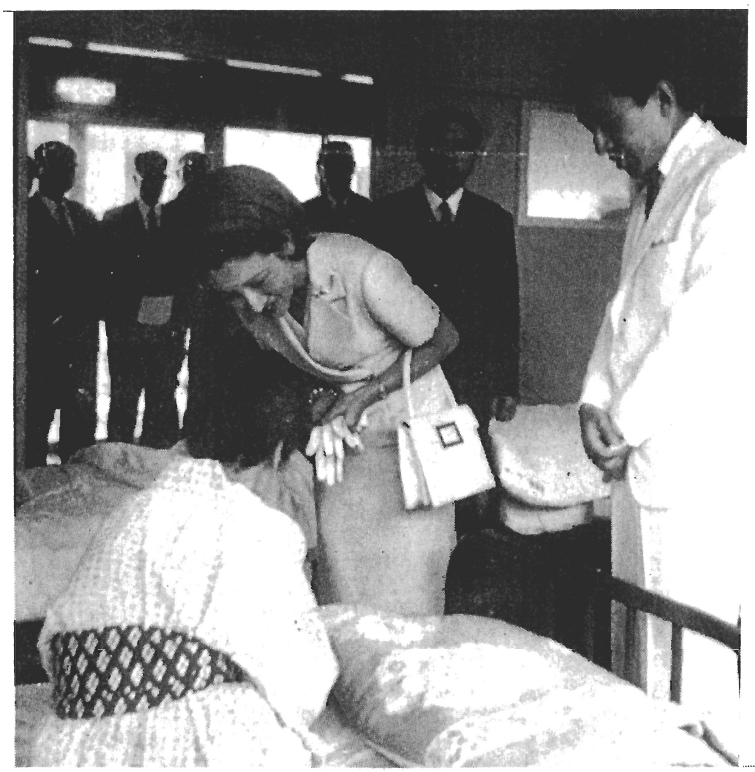
台風十九号と皇太子御夫妻

暴風雨圏は九州全域と、四国中国の西部を、また強風雨圏は紀伊半島まですっぽりおおう。一級台風のため、北上に伴って西日本一帯の風雨は激しさを増す、とニュースは報ぜる。皇太子御夫妻は、全国高校総合体育大会出席のため、四国に御滞在五日の朝、高松空港を飛び大阪から新幹線で静岡県入りし、御視察の日程はぎっしり分刻みに組まれていた。御殿場十字の園の御視察は、六日午前九時〇五分より一時間を予定されていた。

五日荒天の場合は中止、西日本一帯の風雨は激しさを増した。まことに残念ですが、御視察はとりやめとなりました。県の秘書課から電話、受けたのは五日昼をすぎていた。三ケ月程前より内定を受けていたので、すべての準備は終り、お迎えするばかりになっていた。それだけに、在園者も職員も、力がぬけてがっくり、このような好機はないであろうと思うと、失なったことえの残念さが園をおおった。それから数時間が流れた。その間にも、このまま過ぎてしまうような気になれなかった。

午後三時頃、県秘書課から電話、『御殿場十字の園の視察を取止めてはいけない、どんなことがあっても予定どおり実施するように』との殿下のお言葉により、今回の日程内でできなければ、九月にあらためて視察すると、知らせがあった由。そのまま待機しているように。園は再びわいた。暫くして第三報が入り、このたびの日程の中で御視察することになりました。これを追うようにして六日御視察決定時は、五日午後十一時であった。一方変更するたびに、特別奉迎者である理事者、建設委員たちにお知らせする。写真提映を依頼してある鈴木実さん宅を岡本牧師に案内していただき、時間変更を知らせ帰宅。ともあれ、明日にそなえて休むことだ。

床に入る。時計は十二時を示していた。ぐっすり眠り目覚めたのが午前五時、とてもさわやかだ。けれども、空模様は台風一過とは云えぬ雲行き、さて当日を迎えて俄かにきぜわしい思いにかられてしょうがない。



皇太子御夫妻　御見舞い

午前八時過ぎ御視察の時間を告げてくる。十六時五十三分から十七時五十八分に決まったと。指導員の浦田、事務の野々村は、お茶の接待のリハーサル、横山夫人の指導を受け、次第に熱がこもる。時は流れる。こころなしか顔のこわばるのを感ずる。一刻は太陽も顔をのぞかせ、ほっとさせたが、御着十分前、奉迎者はきめられた位置に列ぶ。その時はげしく雨が見舞う。

十六時五十三分、御召車は玄関前にお着。行啓主務官がドアを開けられると、殿下はうすいクリーム色の背広、美智子妃殿下は、白のジレー付シルバーグレーのスーツにオレンヂ色の帽子というさわやかなお姿で皇太子御夫妻は降られ、園長の先導で園長室へ御案内申上げる。予定を変更され、御着になられるとすぐ五分程休憩をとられる。行啓主務官の指示で、竹山県知事、鈴木生二園長、内野県議会議長の順に園長室へ。皇太子殿下を左に美智子妃殿下は右に、県知事より園長ですと紹介される。一同席に着く。施設の概要について御説明申上げる。

先づ十字の園の生育（おいたち）について、

十年前引佐郡細江町中川に誕生したが、その産みの親は、ドイツ人でムッタハウスに属するルニ・ウォルク姉妹で、建設資金も（約一千万円）同姉妹の募金によってなった。特別養護老人ホームとしては、日本に於ける草分けであった。十字の園創立十周年を迎え記念事業として御殿場十字の園が建てられた。本年四月一日開園された。定員は五十名、死因の第一位を続けている脳卒中で後遺症の半身不随の老人がおもに入園の対象者であった。したがって在園者の殆どが《寝たきり》であること。若い寮母や看護婦がしもの世話をおしみなくしていて下さる。ことなどをお話しする。心配した程、かたくならずに語れたのも、皇太子御夫妻はたいへん聞き上手であられたからだ。

七、八分の説明が終ると、皇太子殿下からは、きれ目なく質問がかえってくる。

「在園者の出身地や家族関係は」「家族があっても入園しなければならないのは」「十字の園と云う名は、どうしてつけられたのですか」と質問はいつまでもつきない。「それでは施設の御案内を」、主務官の声に一同席を立った。園長室の入口で、女官長から御下賜品をいただき、殿下にお礼の言葉を申上げる。園長の先導で、両殿下を居室へ御案内申上げる。

順路に従って朝光寮へ、最初に皇太子殿下から「いかがですか」とやさしく、お見舞いの声をかけられた菅沼きみさん(82歳)は御殿場弁まるだしで、一生懸命話すので、話題がつきず、居室は明るいムードに一変する。美智子様は、とてもやさしいお言葉で握手をして下さる。うれしさで言葉を詰らすおとしより、高村茂太郎さん(70歳)は不自由な言葉の中から「待ってたよー」と一言、一人のもれもなく、お見舞いの言葉をかけらる。。寮母、看護婦は介添者として配置されていた。その職員一人〳〵にも「御苦労様です」「ここにこられるまではどんなお仕事でしたか」「将来についてどうしたいと思いますか」など十二の居室を終られた頃は、三十五分の予定時間をはるかに越えていた。特別浴室で、入浴介添の操作と説明をきかれ、さらに洗濯室へ御案内、毎日おむつは三千点も洗われていることなど説明申上げ、廊下で待っていた調理員の全員に「お大変です」「御苦労様」と励みのお言葉をいただく。

御殿場十字の園　玄関

これで予定順路の全部を終えられ園長室で少憩の後、玄関に見送る職員に笑顔をのこし、御泊所へ向われた。

園長　鈴木生二

市民社会と社会福祉その一

―社会福祉事業の根拠―

西村一之

ひと頃、社会福祉の仕事なんかやめてしまえ、という主張があった。こういうことをいう人々の理論はなんであったか。

善意の人たちが人助けのために社会事業なんか行なっているから、社会そのものを良くするための根本的な変革ができないのだ。個人的な博愛の心で行なう社会事業は、結局は資本主義社会の保守的な体制の温存を助けるだけであると。救済事業なんかやめて、病者・孤児・老人などの悲惨をはっきりさせ、世の中の矛盾を行き詰まらせれば、一挙に社会革命を起し、悲惨をなくすことができるのだ、と。果して、これは正しい考え方であろうか。

これとは少しちがうが、今日広く主張され、要求されていることがある。社会福祉のことは国家が、政治がやるべきである。もっともっと、力を入れてやるべきである。しかし、個人がやるべきではない、という考え方である。この方は、判りやすくていかにももっともに思えて、うなずかされそうである。しかし、果して正しいであろうか。

この二つの主張にはともに共通する誤解と盲点がある。その点で正しくない。いったい、《だれ》が病者・孤児・老人を看護し介助するのか。働く人の問題を、これらの意見はまったく忘れていないであろうか。かりに社会革命が行われたとしよう。法律は作られ、制度は生まれるであろう。しかし、だれが働くのか。国家や政府は最新式の施設をいくつも造ることが出来る。

莫大な国費、税金を投入して必要を諸計費をすべてまかなうことが出来る。しかし、その施設でだれが働くのか。国家が命令をくだして『お前は施設で働け、奉仕せよ』と人民に要求するのであろうか。また、公務員をたくさんふやして職員にして、施設で働かせればよい、というのであろうか。

議論をさらに一歩さきにすすめよう。施設もできた。諸費用も国家からくるようになった。職員の数もまず足りるところまで満たされた。と仮定してみよう。このように公務員として集められた職員は、福祉の心にふさわしい精神にしたがって、よろこんで働くであろうか。〈任える〉ためになくてならぬ愛の心に発した仕事をするであろうか。否である。職員は官僚的な事務的な態度で、規則にあるから、規則にはないからという、活きたひとの心には触れない、いわゆるお役所仕事タイプになるであろう。現に公的施設の職員はそうなっている。だいいち国や政府の命令だからといって、これに感激して職員となる人はないし、官公立の福祉施設だから良い仕事が行なわれることにならないのである。たしかに、一部の特定のとくに莫大な計費を投入し、研究をしなければならないようなむづかしい症例の人々については、国家的な施設が必要である。しかし、社会福祉国家の理想を目指して、我々の日常生活を社会福祉化し、そして社会福祉を日常生活化させていくためには、市民各自すべての意識変革が行なわなければならないのである。社会福祉の仕事はだれか他人がやる、やらせるという意識を直さなければならない。意識を変える教育から始めなければならない。

今日、社会福祉国家の名にふさわしい国はどこか。イギリス、オランダ、ドイツ、スイス、それに北欧三国のスウェーデン、ノルウェー、デンマークである。なぜ、これらの国家において社会福祉が進んだのか。これらの国々には共通するひとつの大切な特徴がある。次の号で、その特徴と理由を考えてみたい。

イエスは言われた「あなたも行って同じようにしなさい。」

ルカ一〇・三七

十字の園理事

「夕暮になっても光がある」

旧約ゼカリヤ書十四・七

これは十字の園の標語である。この度世界ジャンボリーに御出席の皇太子御夫妻は御無理な日程の中から十字の園御訪問を御計画され、八月六日午後四時五十三分御来園下された。それは丁度、この標語そのままの光景であった。鈴木園長の御説明を熱心にお聞きになった両殿下は「ねたきり老人」の居室をお回りになられ、一人一人、ていねいに四十九人の老人に御言葉をかけて下さった。

妃殿下はやせた老人の手を取り老人の耳にお顔を近く寄せられて御見舞い下さった。老人の目から止めどもなく涙が流れ、失語症の老人の多くは感泣して声を上げた。殿下は心配そうにしばらく立ち止まられ、静まるのを待って立ち去られた。一時間三十分。

不思議な夕暮であった。光に満ちた夕暮であった。行啓主務官（待従）が度々腕時計を気にしていたのにはお気の毒であったが、知事も市長も高位高官も夕暮の光の中に一つにとけ合った一ぷくの美しい絵であった。この日のために植えられた玄関前の十本の白樺に、しゅう雨が一時、はげしく降る中を職員はぼう然と両殿下の車をお送り申し上げたのである。

＊

日蝋が降るようによく鳴いて、ホームの老人達の顔もよく日焼けして、夏も終りとなった。

鈴木園長の話によると、死亡率は夏が一番少い良い季節だと言う。やがて彼岸花が咲き、萩の花がこぼれ、時雨がホームの窓硝子をサラサラ打つ頃、老人にはきびしい季節がやってくる。廊下にも室内にも便所にも暖房があり、たとえコックをねじると温水が出てくる設備があると言っても、職員達は緊張せざるを得ない。一日三千枚をこえるおむつの処理に洗濯、脱水、乾燥機は一日に五、六回も運転させねばならぬ。職員の健康を祈りたい。「ここは寒さも霜もない、昼も夜もない」と予言者ゼカリヤは言ったけれど、ブザーが鳴れば昼も夜もなくかけつける職員の健康が安じられる。日暮になっても光あれかしと老人達を守る「とりで」であるこの職員のために、祈ってほしい。それが私共の切実な願いである。

医師　林　富美子

八月六日のこと

浦田　君子

八月六日「原爆の日」は日本国民として、忘れられない日であるが、昭和四十六年八月六日は、私達御殿場十字の園に係わる人にとっては、もう一つ忘れ得ぬ感激の日となった。

あの前日の台風情報は、私達の運命を左右するものであった。数ケ月前から待ち望み、この日ために、どんなに多くの方々の御奉仕や、御厚志をうけた事であったろうか、明日をも知れぬ身を横たえ乍ら、この日迄はりつめてきた老人の心は、どんなであろうか。

皇太子、同妃両殿下の御殿場十字の園御訪問は「台風のため、四国の高松から飛行機がでられないので中止される。」この決定が報ぜられたのは、御訪問日の前日昼頃であった。それから何回もの逆転が続いた。「今回は中止される。しかし九月に、改めて御訪問がある」との連絡をうけ更に又「今回の世界ジャン

ボリーに行啓の御日程の中で、御訪問があるかもしれないので待機する様に」との電話があった旨、園長からインターホンで寮に連絡されたのは夜も更ける頃であった。松岡寮長もまだおきておられたのでその事を報告する。

明けて六日、十字の園は何時もと変らず、静かな朝を迎えていた。夜勤の寮母さんは、足音を忍ばせ乍らも忙しく立働き、炊事、洗濯、掃除、等をそれぞれ部所が守られていた。御殿場教会の鈴木長老は早くも奉仕に見えて居られた。礼拝後園長から「両殿下の行啓は予定通り本日行なわれる。但し時間は夕方四時五十三分着に変更された」旨放送された。

「中止してはいけない。老人が待っている」との殿下のお言葉により、悪条件の中から最善がなされる努力をはらわれるためであった事を、後に知らされ、殿下の御熱意に打たれた。園内は急に活気づき、お迎え申し上げる準備が進められた。両殿下が園長室でお休みになられる時、事務室の者がお茶をさし上げる様にと言われ、目前の大役に当惑している処へ、横山事務長の奥様が見え、角田さんとりハーサルを受ける事が出来、落付く思いであった。

林先生は、お庭に咲いたお花をお持ち下さり活けて居られた。玄関脇の薬局カウンターには、桐の花瓶に笹百合のような一枝が活けられたが、清楚な美しさで十字の園にふさわしく思われた。この様な花が、お年寄りの窓辺に自然に咲いている様な園でありたい。自分もその花の一つになれたら……と思う。

間もなく両殿下は、雨の中をお着きになられた。夕暮せまる園の内外は、夢の様な光景のひとときで。順序の変更があり、先ず園長室でお休みになられる。直ぐお茶の用意をする様伝えられた。準備室でお茶を入れていると、待従が来られ、殿下は、お薬をおのみになるのでお茶をうすめる様いわれ、指示通り整える。おしぼりとお茶をのせたお盆を角田さんが持って下さる。園長室の前に二人は並んで立ち指示をまつ。待従がドアを開けて下さり中に入る。妃殿下がにこやかに会釈される。じっとこちらを見つめられる殿下、両殿下のまなざしは人間としての親しさが感じられる。角田さんの持って下さるお盆からおしぼりを、お茶は小型丸盆にのせてお運びする。待従が薬包紙に包まれた薬をお出し申上げ、妃殿下も殿下にすすめるられると、殿下は小さいお声で「まだ、あとで」という意味のお言葉をかわして居られる御様子であった。女官長らしい方が立って居られ私の耳もとで「御苦労さまでした」と言われた。園長の説明の後、お耳寄りの居室をおまわりになられお帰りぎわに再び、園長室でお休みになられ、予定外の事であったが、角田さんと二人でお茶とおしぼりをお運びした。両殿下だけでお休みになって居られた。妃殿下は、ソファにかけられた腰を深くかがめられ、何か話しかけられる様に、美しい笑顔を向けておいでの様でした。殿下も前より一層親わしいまなざしでお答え下さる。御年寄り一人一人にもこの暖かい御見舞いがそそがれたのでございましょう。

十八時二十分お帰りの車が動きました。

経過報告

四・一二　入園者第一号お年寄りを迎える。
四・一七　職員（浦田・土屋）追突にて負傷
四・二〇　水道復旧
四・二五　高根学園児慰問に来園
四・二六　西村牧師を迎え勉強会
四・三〇　西田中老人クラブ来園
五・一　園長公舎着工七月完成
五・一九　赤電話設置
五・二〇　職員レントゲン撮影
五・三一　県秘書課皇太子行啓の下見諸打合
六・二〇　駒門自衛隊芝張り奉仕
七・七　入園者五〇名となる。
七・二八　建物本監査
八・一〇　皇太子同妃両殿下行啓
　　市社会文教委員来園
　　米国合同長老教会福祉施設視察団来園
八・二三　沼津三島区婦人会奉仕
　　東田中老人クラブ・婦人会来園
九・五　立正佼成会青年部奉仕
九・一〇　御殿場市老人クラブ来園
九・一三　三島市町内会長六四名来園
九・一五　敬老の日園遊会開催
　　家族・奉仕者多数来園

あとがき

★☆★☆★☆★☆★☆★☆

開園、入寮……整備と待機の四月を経て現在御殿場十字の園は五〇名の寝たきりのお年寄り二〇数名の職員、三〇〇名を越える祈りの友にささえられるまでになりました。「ここに教会がある」（信徒の友八月号）に十字の園が招介されております。

皇太子、同妃両殿下は困難と思われた日程の中に、当園を御慰問下さいました。入園間もないこと、例のないことでお年寄りの喜び感激は永く記憶に止まることでしょう。

秋も深まってまいります。御殿場の空は、朝も夕も澄みわたりました。特に夜空の星のまたたきは、一極かがやきをますでしょう。

御殿場十字の園
支える会献金お知らせ

46.9.15 現在

延人数	315人
献金額	999,577円